

平成 22 年 1 月 29 日

私立大学図書館協会
国際図書館協力委員会
委員長 白井 文子 様

京都精華大学情報館	大坪一幸
上智大学図書館	高橋正江
白百合女子大学図書館	高木 彩
北星学園大学図書館	幸坂 希
明治学院大学図書館	鈴木直子
立命館アジア太平洋大学総合情報センター	大勢美穂

(大学名 50 音順 6 大学 6 名)

2009 年度海外集合研修報告

平成 21 年 11 月 22 日 (日) ~ 11 月 29 日 (日) まで、2009 年度海外集合研修に参加いたしましたので、別紙のとおりご報告いたします。

私立大学図書館協会海外集合研修報告書

・研修概要

(1) 研修テーマ

「カナダの大学図書館探訪」

カナダの大学における先進的な図書館サービス・運営の具体的な事例に直接触れ、各大学図書館の最新の取り組みなどの情報を得る。また、スタッフとの質疑応答を通し、図書館の運営体制・組織・サービスのあり方など参加者の所属図書館での実践的な課題設定に結びつけるとともに図書館職員相互の国際的な人的交流を実現する。

(2) 訪問先

University of British Columbia Library (Vancouver)

大学 URL <http://www.ubc.ca/>

図書館 URL <http://www.library.ubc.ca/>

Simon Fraser University Library (Vancouver)

大学 URL <http://www.sfu.ca/>

図書館 URL <http://www.lib.sfu.ca/>

Vancouver Public Library (Vancouver)

URL <http://www.vpl.vancouver.bc.ca/>

(研修日程)

期間：平成 21 年 11 月 22 日（日）～平成 21 年 11 月 29 日（日）

1 日目：11 月 22 日（日）17:40 成田空港発 9:10 バンクーバー空港着

2 日目：11 月 23 日（月）9:00～20:00 University of British Columbia Library

3 日目：11 月 24 日（火）9:00～16:30 University of British Columbia Library

4 日目：11 月 25 日（水）9:00～20:00 Simon Fraser University Library

5 日目：11 月 26 日（木）9:00～15:30 Simon Fraser University Library

6 日目：11 月 27 日（金）10:00～11:00 Vancouver Public Library

7 日目：11 月 28 日（土）11:30 バンクーバー空港発

8 日目：11 月 29 日（日）14:35 成田空港着

・事前準備

(1) 事前確認、研修

参加者の担当業務、業務歴等の情報を交換し、また各人で訪問先の Web サイトや関連文献等を調査した。

(2) 訪問先への質問事項の収集・調整(事務局)

参加者から訪問先への質問事項を収集し、調整し、事前送付した。

(3) 事前説明会および打合せの開催(11月11日(水)於:立命館東京キャンパス)

事務局から研修日程や訪問先との折衝状況の詳細説明を受けた。また、各役割分担を行った。

. 研修報告

(1) 訪問機関別報告

A. University of British Columbia Library

概要

ブリティッシュコロンビア大学(英: University of British Columbia、略称 UBC)はカナダのブリティッシュコロンビア州にある州立の総合大学で、22 学部 118 学科を擁し、学生数約 50,000 人に上る西部カナダ最大の名門大学である。国際的にも知名度が高く多くの留学生を受け入れており、2008 年末時点で、約 6,000 人の留学生が学んでいる。大学ランキングとしては、The Times Higher Education Supplement によるとカナダ 2 位、世界 33 位のランクが与えられている。



図書館は、中央図書館のほか、22 の特色ある図書館があり、中でもアジア図書館は、日本語をはじめ、アジア各国語の書籍を 55 万冊所蔵し、カナダで一番の規模である。また、カナダ先住民の資料を収集している First Nations House of Learning は、独自の分類法により資料を収集している。全図書館の蔵書数は、560 万冊、ebooks 34 万点、ejournals 7.8 万タイトル、databases 400 種、電子コレクション 43 万点、マイクロ 520 万点、地図・ビデオ 84.1 万点を所蔵している。図書館職員は 300 人以上(内 80 人がライブラリアン)であり、年間 270 万冊が貸し出され、300 万人が閲覧に訪れる。400 万人がウェブサイトを開覧し、ページリクエストは 3,000 万ページにも上る。

特色としては、カナダ初の 180 万冊収納可能な自動書庫と、中央図書館の歴史的建築を残したまま学習支援機能を拡充させた Irving K. Barber Learning Centre が上げられる。また、のべ 215 人のサブジェクトライブラリアンのメールアドレス、電話番号、写真、プロフィールを図書館 HP 上で公開しており、専門分野で積極的な指導を行っていくというリサーチ・ライブラリーとしての意気込みが感じられた。今後は、チームで主題を担当する、学部学科や他部署との連携を行うなどよりアクティブな行動をライブラリアンに期待したいとペアレント図書館長は語る。

UBC 図書館の最重要課題は、なんといっても資料のデジタル化である。7 月に就任したペアレント館長は、LAC(カナダ国立図書館・文書館)に勤務した経歴を持ち、次期 IFLA(国際図書館連盟)の会長に選任されている。このペアレント館長の下、UBC 図書館は、地域との連携を図

り、外部資金を導入しながら積極的にデジタル化を推進している。

B. Simon Fraser University Library

概要



サイモンフレーザー大学（英：Simon Fraser University、略称SFU）は1965年に創設された、カナダブリティッシュコロンビア州にある州立の総合大学である。大学名はカナダ西海岸を開拓した探検家サイモン・フレーザー（Simon Fraser）に因み命名された。学部生 27,479 名、大学院生 5,461 名、教員約 900 名、職員数約 3,500 名である。バーナビー、サリー、バンクーバー中心部の 3 キャンパスをもつ総合州立大学のひとつである。

図書館はバーナビーキャンパスの W.A.C. Bennett Library、サリーキャンパスの Fraser Library、バンクーバーの Belzberg Library の 3 つがある。図書館全体の蔵書は 130 万冊、ebooks 17 万点、ejournals 6.1 万タイトル、冊子体の逐次刊行物 6000 タイトル、500 種類のデータベースを所蔵している。

それぞれのキャンパスで、ラーニングcommonsが展開されており、きめ細かい利用者サービスが実施されている。図書館の HP 上で「Askaway <http://www.askaway.org/>」(ブリティッシュコロンビア州の大学図書館・公立図書館が共同でレファレンス回答にあたるシステム)を通して、図書館が学生との双方向の取り組みを積極的に行っていることが見受けられた。また、リン館長はじめとするライブラリアンは、SFU、UBC、Stanford 大学と共同でオープンソースソフトウェアの開発・普及を進める PKP (Public Knowledge Project) での研究活動に従事しており、電子ジャーナルの編集・出版を行うための"Open Journal System (OJS)" や会議予稿集の編集・出版を行うための"Open Conference Systems (OCS)"などのソフトウェアの開発に参画し、さらに図書・単行本の編集・出版を行うための"Open Monograph Press (OMP)"のリリースにも中心的役割を果たしており、ライブラリアンの専門的能力の高さが見受けられた。他には、カナダ出身作家の文学作品に関わる資料やバンクーバー出身のパンク・ロックのポスターなどの貴重資料を広く収集・保管、また閲覧に供することで、図書館として地域文化の振興に寄与されていた。最後に、コンピューターエンジニアリングや工学部をもつ、サリーキャンパスでは図書資料や AV 資料のみならず、カメラ、ビデオカメラなどの撮影機材からギターなど楽器やテレビゲームなども資料番号を貼付し図書館カウンターで貸出しをしていることも、日本ではあまり見受けられないサービスで SFU のユニークな特色のひとつと言える。

C. Vancouver Public Library

概要

バンクーバー公立図書館（英：Vancouver Public Library、略称 VPL）は、中央図書館と 21 の分館からなり、蔵書数は図書約 238 万冊、雑誌約 7200 タイトル、視聴覚資料 23 万点、オンラインデータベース 112 種。人口の 44.99% に当たる 34 万人が利用登録をしている（2008 年統計）。



私たちが訪問した中央図書館は、イスラエル系カナダ人建築家モシェ・サフディの設計により 1995 年に建てられたもので、外観は円柱形のように見えるが、

実は、長方形の平面系の図書館を楕円形の外郭が囲んでいる形で、デザイン性と利便性を両立している。

また、楕円形の外郭を包み込むようにさらに半円形の外郭が作られ、この外郭と図書館との間はカフェのあるプロムナードとなっている。このプロムナードの中に図書館の入口があるが、平日でも 10 時前には、開館を待つ人でかなり混雑する。中央館の 1 日の平均来館者数は約 6,000 人である。

移民の多い土地の公共図書館だけあって、英語・フランス語以外の資料にも力を入れているほか、ホームページの利用案内も英語・フランス語のほかに日本語・中国語・韓国語・スペイン語・ベトナム語・ヒンディー語の全 8 ケ国語で読むことができる。また各国語での就職支援、父親向けの育児支援や英語学習プログラムなどの各種プログラムも充実しており、日本語のものも多少ある。どの言語のプログラムやサービスをどれだけ用意するか、資料をどれだけ購入するかは、住民の中でその言語を利用する人の割合に従って市が決定する。パソコンを利用するために来館する人も多く、中央館には 300 台の利用者向け端末がある。

館内のレイアウトは、中央の長方形のフロアに書架やカウンター、パソコン利用のコーナーなどが配置され、渡り廊下でつながれた楕円形の外郭部分には個人用のキャレルが配置されている。静かに本を読みたい人はそちらのエリアを好んで利用しているとのことで、大学図書館と同様にゾーニングに配慮している。

（２）個別研修テーマの報告

A. 多文化・多言語サービスと利用教育

移民政策をとってきたカナダは、多文化・多言語国家である。公用語は、英語とフランス語であるが、アジアからの移民が多く、母語と公用語とのバイリンガルも多い。そのカナダの図書館における多文化・多言語サービスをこの目で探ってみた。

UBC アジア図書館

アジア図書館は、日本語をはじめ、アジア各国語の書籍を 55 万冊所蔵し、カナダで一番の規模である。資料の収集は、大学創立と同時に始まり、1950 年代後半に中国語と日本語研究のプログ

ラムが開始され、現在は、韓国語、サンスクリット語、パンジャビ語、ヒンディー語、ウルドゥー語、インドネシア語、チベット語を含む 9 言語の資料が収集されている。大阪万国博覧会時のサンヨーパビリオンが移設され、それがアジア図書館の建物となっている。バンクーバーとオカナガンの 2 つのキャンパスに通う約 50,000 人（内大学院生約 8,000 人）の学生ならびに、中国、韓国、日本、インド、香港、インドネシア、台湾等の留学生約 6,000 人に対してサービスを行っており、今後、モンゴル、新疆、ベトナムについての研究資料を収集しようと意欲的である。



館長は、中国系カナダ人エレノアさん、日本語担当ライブラリアンはイラン系カナダ人シリルさんというように、スタッフからしても多民族国家を反映している。シリルさんは、岡山で研修していたことがあり、日本への造詣も深く、日本の古典を紐解き「JapanKnowledge」や「聞蔵」の使い方を利用者に教えているとのことである。

また、世界のアジア研究者たちと、時折ビデオ・カンファレンスをするとのこと、アジア研究においては、北米の重要な拠点であることが伺えた。

UBC XWI7XWA 図書館

1993 年、First Nations House of Learning に XWI7XWA 図書館という名前がつけられた。先住民「Squamish」の言葉で、“エコー”という意味である。入口には、小さい滝が流れ、自然と共生する先住民の生活が忍ばれた。独自の分類法(the Brian Deer Aboriginal classification system)により資料を収集分類しているこの図書館では、614 のコミュニティを持つカナダの先住民に関わる資料を収集するとともに、先住民学生の教育および研究者へのレファレンスがなされている。資料には Aboriginal subject headings が付与され、UBC カタログから検索できるようになっている。この図書館に集うものは、誰もがファーストネームで呼び合うとのこと、一人ひとりを大切にする教育がなされていた。

留学生に向けたサービス

UBC の留学生数は、約 6,000 人であり、この学生もまた UBC の多文化・多言語的要素を構成している。留学生の学費は、正規生のその 4-5 倍であり、大学側は財政面からも留学生を積極的に受け入れている。図書館としては、多言語プログラムは実施していないが、英語を母国語としない学生のための英語学習ワークショップを開いている。

SFU は人文社会系の総合大学であり、3 つの図書館を持つ。1965 年創立で UBC のように歴史的資料館はないが、スタッフが実に楽しそうに仕事しており、非英語人にとっても心地よい環境を醸し出している。留学生数は、約 2,300 人であり、SFU にとって留学生は上顧客であると、図書館人事・予算担当のトッドさんは言う。彼に多文化とは何かと質問してみた。ちょっと間を置いて「君たちが自由に生き生き行動できるこの環境こそ多文化社会というのではないかな」と答えた。確かに SFU はそんなところであった。そのうえ、SFU 図書館でも、専任のスタッフを置いて、英語を母国語としない学生のためのワークショップ(English Bridge Program)を常時開催

して、学習支援に余念がないのである。

多民族に向けたサービス

VPL は、まさに多文化・多言語図書館の典型である。収集している図書は 15 言語にも及び、ホームページに英語、日本語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語、ヒンディー語、ベトナム語で図書館のサービス内容が記され、利用者はウェブで本の貸し出し等のサービスを受けることができる。英語を母国語としない利用者のための多言語プログラムも多く、地域へのサービスを使命とする公共図書館として、その地域を構成する人々に最大限に奉仕したいという意気込みが感じられた。特に、IT ワークショップや多言語の就職支援プログラムは、利用者には十分活用されているようであった。

感想

多文化・多言語サービスは、確かにカナダの図書館にあった。それは、先住民・移民に対する母語サービスであったり、近年は留学生に対する英語サービスであった。「カナダは心地よい」それがひとりの外国人の感想である。それはなぜか、カナダは多文化・多言語に対するハードルが低いのではないか。古くからの経験により、言葉を障壁とさせてはいけないという強い思いがあるからではないか。「英語ワークショップ」を図書館でこれでもかと実施しているではないか。多民族ではない日本で図書館サービスを行う私も、言葉を障壁とさせてはならない、いや障壁としてはならないと強く思うのである。さて、私たちが準備するワークショップは・・・やはり「英語ワークショップ」なのではないかとおぼろげに見えてきた。

B. ラーニングコモンズ

Dr. Irving K. Barber Learning Center /Chapman Learning Commons

1) 概要

Dr. Irving K. Barber Learning Center は、自らカナダを代表する木材会社を築き上げ成功した、UBC の卒業生 Dr. Irving K. Barber からの多大なる寄付金を主たる財源とし、州政府、UBC の 3 者で、2008 年 4 月に学習支援機能を拡充を目的とし改修された中央図書館であり、Chapman Learning Commons(以下 CLC) は、その 3 階に設置されている。

2) 施設概要



総床面積 250,000sq.ft(2350 平米)の 4 階建の建物である。外観は、旧館の歴史的な重厚感を残しながらも、ガラス張りの壁面など近代的な要素も感じられる。内観は、中央部分が吹き抜けとなっており、開放感があふれる作りとなっている。1 階は大小の教室が設置されている。2 階中央に正面入口を据え、南北に広がる構造となっている。入って右手には、軽食を取れるカフェテリア、「ike's café」を併設している。左手側、自動書庫 (ASRS) を備えた「circulation service desk」や、教員の FD 活動を担う施設、TAG (Teaching Academic Growth) が設置されている。建物の 2 階から 4 階の中央部分は、「Open Study Spaces」となっており閲覧席やソファが置かれ個人やグループでの学習など自由に利用できるのに対して、扉を介した北側には携帯電話使用や談笑は禁止されてい

るだけでなく、物音を立てることさえ憚られるような静寂さが漂う「Quiet and Silent Study」となっており、同じ建物内でありながら、利用者は目的に応じた学習環境の選択が可能となっている。3階奥に、学習スペースとは、扉で区切られた CLC がある。また、3,4階には、HP から予約可能なグループ学習室が 8 部屋ある。開館時間は、毎日朝 7 時から深夜 1 時までであり、図書の貸出しは、月曜日から木曜日は、朝 8 時から夜 10 時まで、金曜日は朝 8 時から夜 6 時まで、土曜日は 10 時から 6 時まで日曜日は 12 時から夜 8 時までとなっている。Chapman Learning Commons は、月曜日から木曜日は、朝 8 時から深夜 12 時まで、金曜日は朝 8 時から夜 8 時まで、土曜日は 10 時から夜 8 時まで日曜日は 10 時から深夜 12 時までとなっている。

3) CLC <http://www.library.ubc.ca/chapmanlearningcommons/>



3階の「Open Study Spaces」の一部に CLC が設置されている。中央に、「HELP DESK」を設け、12名の学生スタッフが利用者支援を行っている。室内は大きく 3 つに分かれており、テーブルや椅子、PC がある中央部分と、ワークショップや講演会、会議などを開催できる広めの部屋が設置されている。CLC では、学生チューターが駐在し、学習支援や、レポートの書き方や、PC のソフトウェアの使い方などを学生が気軽に指導してもらえるピア・サポートを導入している。また CLC における支援は図書館が実施しているプログラムのみならず、Alma Mater Society、Math Resource Centre など図書館以外の学部などによる、5 つのチュータープログラムも実施されている。これらのプログラムチューターとしては数学や物理の授業をサポートしてくれるテーブルがあり、学生スタッフが相談にのっている。これらの図書館以外のプログラムに携わる学生支援スタッフは、「ヘルプデスク」の 12 名とは別に、それぞれのチュータープログラムで独自に雇われており、CLC は場所を提供しているだけである。見学当日も空席がないほどほぼ満員状態で、学生には好評のようである。また、Windows や Mac の PC (36 台) やスキャナー、複写機など学生がレポート作成や課題作成などで必要とされる設備が備えられている。

ア・サポートを導入している。また CLC における支援は図書館が実施しているプログラムのみならず、Alma Mater Society、Math Resource Centre など図書館以外の学部などによる、5 つのチュータープログラムも実施されている。これらのプログラムチューターとしては数学や物理の授業をサポートしてくれるテーブルがあり、学生スタッフが相談にのっている。これらの図書館以外のプログラムに携わる学生支援スタッフは、「ヘルプデスク」の 12 名とは別に、それぞれのチュータープログラムで独自に雇われており、CLC は場所を提供しているだけである。見学当日も空席がないほどほぼ満員状態で、学生には好評のようである。また、Windows や Mac の PC (36 台) やスキャナー、複写機など学生がレポート作成や課題作成などで必要とされる設備が備えられている。

【 学生支援スタッフの指導・育成について】

1) 組織運営

コモンズ専任のライブラリアンが学生スタッフの管理・育成を担っている。経験ある学生スタッフはスタッフチーム内で、リーダーシップ、メンターシップの役割を担っている。

2) 応募条件

- ・ UBC に現在フルタイムの学生として在籍していること
- ・ 少なくとも UBC 在籍 1 年であること
- ・ 累加平均が少なくとも 75% であること
- ・ コンピューターの能力に秀でていること(追加の研修は提供される)。Mac(とそれに関するソフトウェア)の経験があるとなおよい
- ・ 口頭と書面での優れたコミュニケーション能力

3) 応募状況

・60-100名ほどの応募があり、その中で25名ほどがインタビューを受け、最終的に12名がスタッフとなる。

4) 待遇

CLCのヘルプデスクで働いている学生スタッフは時給\$16.16である。時給の内訳は、大学が\$7.16が負担し、政府の補助金（ワークスタディというプログラム）から\$9が支出されている。

<http://www.students.ubc.ca/careers/students/work-and-volunteer-opportunities/work-study-work-learn/>

5) 勤務

図書館で雇用される、「ヘルプデスク」については図書館の担当者、ジュリーさんが担当している。それ以外はプログラムを実施しているセンターで行われている。

シフトはプログラムアシスタントによって作成される。学生支援スタッフは、勤務可能な時間をエクセルのシートにて提出し、それに基づいてデスクシフトのスケジュールが作成され、スケジュールはGoogleDocsを使ってスタッフ内で共有され、学生がシフトの交換など各自でスケジュール調整できるようになっている。労働時間は、週8時間の実働と、1時間のミーティングなどのプログラミングワークからなっている。昼間、2時間、夕方、夜が4時間となっている。

6) 研修

新人スタッフには、研修が課せられ、ジュリーさんが研修の計画と実施の責任者となっている。この研修は5時間のオンライン研修が含まれ、勤務開始までに修了することが義務付けられている。この他、図書館以外のプログラムのチューターも参加する、2日間の実地研修があり、お互いのコミュニケーションを図る機会にもなっている。

感想

学内には学部所属の図書館もあり、このDr. Irving K. Barber Learning Centerは学習者中心の図書館となっていた。図書館でありながら、蔵書のほとんどは自動書庫で管理されており、従来の図書館のように書架に囲まれている閲覧席などは一部を除きほとんどない。吹き抜け中央には、近代アートの大きなシャンデリアがあり、まるで美術館のようであった。また、2階のフロアには、机、椅子のセットは置かれておらず、低い四角形の可動式のソファが点在し、学生は自由に足を伸ばしたり、あぐらをかくなど、自分の部屋にいるようなリラックスした雰囲気、黙々とPCに向かっている姿がとても印象的であった。

CLCだけでなく、このセンター全体が、コモンズとしての機能を担っている。レファレンスも、来館型から、電話メール、メッセージなど非来館型のサービスも充実し、あらゆる媒体を用いて利用者からの質問に対応しようとするオープンで積極的な姿勢が伺える。かつての図書館という場合は、膨大な情報資源を学生の学習、研究へインプットする個人中心の場でしかなかったとすれば、このセンターにおいては、従来型の図書館の機能を「Quiet and Silent Study」に残しつつも、学生同士で議論する場（Open Study Spaces）や、問題や課題を解決する場（CLC）と、集団で学習し、アウトプットのためのグループ中心の場としての機能を果たしている。図書館のみならず、各センターや学部との連携も、コモンズの機能強化を図るうえで重要なファクターの一つである。

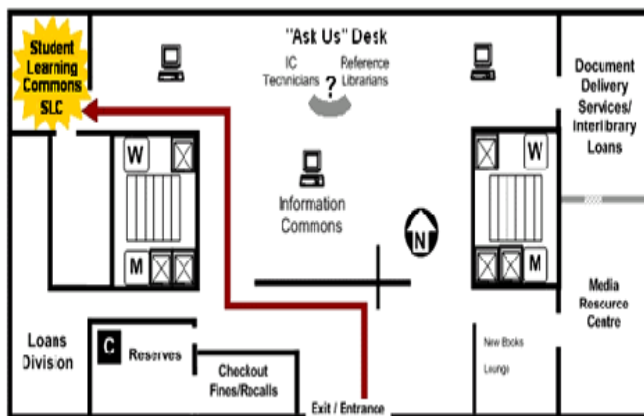
最後に、これほど設備やサービスを可能とすることは、Dr. Irving K. Barber氏の尽力に他なら

ない。このセンター以外にも、音楽ホールなど寄付によって造られ、寄付者の名前を付けられた建物が多くあった。日本とカナダの寄付に対する文化の違いによるところが大きいのだが、そういった寄付の交渉をするのは大学の教職員であることからすると、やはり経営の手腕なくしてはこの、サービス支援はなしえなかったと感じる。

Learning Commons ~ S F U 編 ~

1) 概要

The students learning commons(SLC)



バーナビーキャンパス 中央図書館である、W.A.C. Bennett Library の3階に設置 2006年秋から運用を開始している。

サービス時間
平日 9:00am - 4:30pm。

Yosef Wosk Student Learning Commons(YWSLC)



サリーキャンパスの図書館の一室に設置されている。

サービス時間
平日 9:00am - 4:30pm。

バンクーバーキャンパスにも設置されている。

2) 取り組み

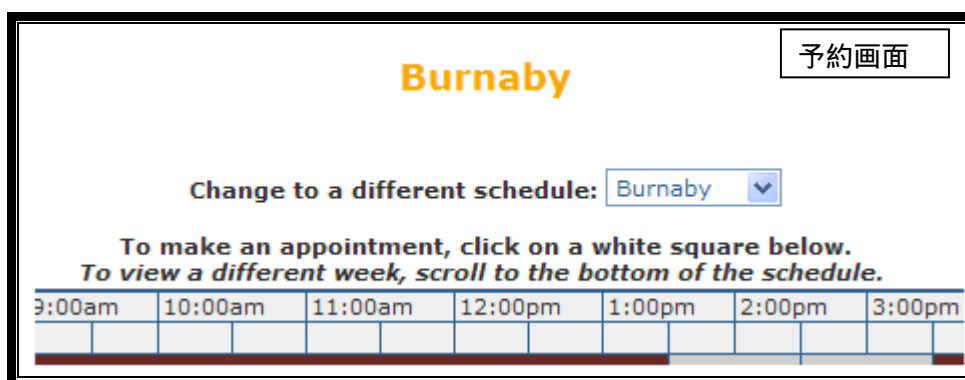
元々、ライティングセンターは教学部門の担当ではあったが、カリキュラムの変更に伴い、学生の学習負担増となったため、授業についていけない学生が発生し、退学率が高くなった。そのため、学生が授業についていけるためのきめ細かい学習支援サービスが求められるようになった。そこで、アカデミズムの中心である図書館に一元化し設置した。当然ながら、SLCでは論文編集や校正はしない、あくまでも学生の能力や技術向上を目的としている。

このセンターには、ライブラリアンだけではなくライティングやラーニングの指導をする教育学の修士号を持ったセンター雇用の大学教員がコーディネーターとして常駐し、専門的な指導を

している。それ以外にも、学生同士の方が、気軽に相談できるというメリットを生かし、学生がチュータースタッフとして学生の相談に対応するピア・ラーニング制度を導入している。

SLC Peers は、優秀で対人能力の高い学生にボランティアとして参加してもらっている。SLC Facilitators も同じく優秀で対人能力の高い大学院生が選ばれていた。この Peers や Facilitators に対する育成や指導は、コーディネーターである教員が担当する。SLC は、この Peers、Facilitators、コーディネーターの 3 者が協力と連携のもとにうまく機能している。

この SLC で相談したい学生には、最初にデータ登録が必要で、その後は希望予定時間 24 時間前までに予約して、申し込む。また、利用に関しては誓約書への署名が必要である。25 分単位で最大 6 時間まで延長が可能である。



その他、図書館の HP 上に「Askaway」という、チャット形式で学生が気軽にレファレンスライブラリアンへ質問ができるシステムへの入口を設けており、学生との双方向でのコミュニケーションが図れる。「Askaway」の導入後、HP からの問い合わせ数が、昨年の 2,517 から 3,167、26%も増加した。また、レファレンス利用率が 15%増加した。

3) 取組み事例

Consultations

2008 年度は 1,984 名の学生の相談を受け付けた。これは、前年より 12%増加している。

Open registration workshops

2008 年は、128 回の開催に 1,252 人が参加した。

"Top 10 Things to Know About University Writing"

"On Your Way to an 'A'"

SLC Projects

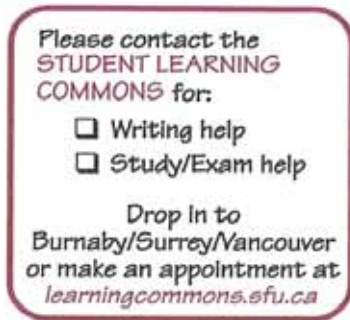
- Academic Enhancement Program (AEP)
1 年生のコンピューターサイエンスの正課の授業と SLC が連携し、大学生活を成功に導くための学習活動を身につけるプロジェクト
- Back On Track (BOT)

学業から遠ざかっている学生への支援

- TechBytes

サリーキャンパスでの、ソフトウェアの利用方法についての支援

教員との連携



SLC は、教員からの授業での成果のフィードバックや提案、SLC が主催するワークショップへの参加を促してもらえるよう積極的にお願している。

また、SLC では授業で支援が必要と判断される学生へこの「ラーニングcommons」でのサポートを受けることを促すためのステッカーを配布し教員と SLC の連携強化に努めている。

感想

SFU のラーニングcommonsについては、大学の規模と同様 UBC とハード面ではそれほど大きくはない。ただ、サービス面においては、ライティングセンターに専任教員を配置し、学生支援、学生スタッフの育成に携わるなど、きめ細かいサービスが展開されていることが伺えた。両大学に共通する点としては、学生スタッフについては成績や IT スキルなど高い能力のみならず、コミュニケーション能力の両方が備わっていることが要求され、資質の維持を図っている点である。

C. 図書館と利用者のコミュニケーション

戦略としての広報

UBC では、対象別・目的別の多様な広報を行っている。例えばニュースレターだけでも、寄付者向けの”Friends”(年2回)、教員向けの”Insight”(年1回)、Irving K. Barber Learning Centre の広報誌”Connects”(年2回)などを発行している。

印刷媒体としてはその他にライブラリアンの研究成果を掲載する Bulletin や、UBC Report があり、印刷媒体以外ではオンラインでの図書館の活動報告や、プレスリリース、週刊のメールマガジンなどがある。



学内の他部署と協働して行う広報としては、博物館、シアター、ラーニングセンターなど様々な部署の担当者からなる UBC Attraction Committee という委員会に参加し、UBC 全体の魅力度向上の一環として図書館の PR を図るほか、同窓会の会誌”Trek”には毎号の表紙に図書館のコレクションの写真を提供している。また、UBC では貴重書をデジタル化してサイト上 (<http://www.ubcvault.ca/>) で公開しているが、その画像は UBC グッズの絵葉書やトートバッグなどにも使われている。それらのグッズの売り上げは図書館の財源となるだけでなく、オンラインストアでの購入時には図書館への寄付を追加することもできるようになっている。加えてそれ

らの貴重書画像は Campus Art Initiative の一環としてキャンパス内の学内のあちらこちらにあしらわれている。資料の保存や活用のためのデジタル化だが、広報にも多大な役割を果たしている。

外部メディアへの働きかけとしては、ブリティッシュコロンビア州の図書館協会(British Columbia Library Association)が発行する”BCLA Browser”(年3回)への情報発信、ラジオ、TV、新聞などのメディアに向けたプレスリリースなど、積極的に行っているが、様々なメディアの中でも重要視しているのは印刷媒体とのことである。

また、政府とのつながりを保つことも広報担当者の領域である。UBC の取り組みを常に政府に知らせ、時には州政府の取り組みを UBC が手助けすることができるよう、政府との関係を保っている。

これだけの多様な広報には多数のデザイナーやカメラマンが関わっているが、その統括と編集・企画は、広報担当者一人で行っている。広報担当者は UBC の姿を定義づける重要な存在であると見なされているようである。

UBC での広報の様子を聞いて印象に残ったのは、思っていた以上に印刷媒体を重視していることと、学外への広報に注力していることだった。

それほどまでに印刷媒体を重要視するのはなぜかと質問すると、「来館時に手に取り、持って帰ってもらえるので、形のある紙媒体はやはり便利である」ということ、そして「人がどれだけ UBC のサイトに自分でアクセスしてくれるのかを考えると、インターネット上だけでの広報は弱い」との回答であった。

日本の多くの図書館では、人員や予算の問題から、印刷媒体の広報物をそれほど多種多様に制作することは難しく、利用者に広く効率的に広報できるという利点を考慮して図書館サイト上の情報発信が選ばれることが多いと思われるが、それに対しては「その方法が適切であるかは、ターゲットがどれだけ PC を持っているのかを検証する必要がある」と指摘された。学生に向けた告知であれば、学生が自宅でどれだけ PC を持っているのか、学内でどれだけ容易にインターネットにアクセスできるのか、また地域の人に向けた告知であれば、地域にどれだけ PC とインターネットが普及しているのか、情報発信の目的ごとにターゲットを分析した上でメディアを選ぶことが重要であると再認識した。

最後に、小規模な図書館での広報に対するアドバイスを求めると「職員と話して、広報したいアイデアを募ることが一番」との回答であった。大袈裟なことではなく、立ち話でもよい、ただ職員に会いにいけばよい、自分も常にそのようにしているとのことで、大規模な図書館ながらも、あるいは大規模であるからこそ、職員同士のコミュニケーションを図っていこうという努力が不断になされているようである。

感想

訪問した3館はいずれも各種ニュースレターを作成しており、興味深いものも多くあったが、UBC の広報がとりわけ印象に残ったのは、全体を俯瞰する責任者がいて、全学的な視点で広報を管理していたことと、ペアレント館長がこれからの図書館員のキーワードだと語っていた”Reach out”がどういうことであるのかが、広報の中でも体现されていたように思えたことからだった。

UBC では Irving K. Barber Learning Centre などの施設を卒業生の寄付によって建てたり、貴重書デジタル化のような多大な財源を必要とするプロジェクトを企業とのパートナー契約によっ

て実現したりと、外部資金の獲得を積極的に行っているが、その成果である Irving K. Learning Centre の取り組みや貴重書画像を PR することは、図書館の PR になるだけでなく、寄付者にスポットを当てることでもあり、さらなる外部資金の呼び水にもなっている。このように図書館の外に働きかけることによって新しい取り組みを可能にしていく広報戦略は、これから日本の図書館員にも求められることになるのではないかと思った。

利用のための広報

UBC では、利用者向けの様々な広報ツールも作成している。利用案内としては、身分別の図書館利用ガイド、各図書館のガイド、論文探しのガイド、電子ジャーナルのガイドなどのパンフレット類が充実しており、館内のパンフレット架で入手できるほか、その多くは図書館サイト (<http://www.library.ubc.ca/pubs/>) からダウンロードできる。また、開館時間や各フロアの分類早見表などの便利な情報や、館内での飲食に関するポリシー、盗難への注意喚起のメッセージなども、しおり形式の手に取りやすい形でパンフレット架に置かれている。ほとんどは館内制作のシンプルな文字主体のもので、経費はかけないが行き届いた内容と形で図書館からのメッセージを発信していた。

SFU は UBC に比べ規模が小さいため、学生一人ひとりに目を配り、よく声掛けする態度が全学の教職員に見られたが、利用者向け広報にもその姿勢が表れていた。ラーニング commons の項でも触れた、学生の利用を促すためのステッカーもその例の一つである。また館内掲示ひとつとっても、学生のニーズや心情への敏感さを感じた。例えば、閲覧室からドアを隔てた階段スペースには「携帯電話はここで」の掲示があったが、「閲覧室での通話禁止」といったように「No」の表現を使うことは避けているので、このように工夫したとのことである。

感想

UBC, SFU の 2 大学で感じたのは、図書館からの情報発信やメッセージが決して図書館の言いたいことを一方的に投げかけるだけには終わっておらず、利用者のニーズや利用実態をよく知った上で、適切な方法で効果的に伝えられているということだった。

例えば、日本と同様に初めは館員の中に葛藤があったという館内飲食の許可やグループ学習空間の設置に関しても、学生のニーズや生活をよく知ることによって実現に至ったものようである。新しいサービスやポリシーが浸透するまでには、図書館からの様々な広報、働きかけが必要になるわけだが、一人ひとり異なる様々な利用シーンや学習レベルがあることを踏まえた上で、それぞれに適するサービスや空間を用意し、上手な利用がなされるようメッセージを投げかけていくことが、成功の秘訣であるように思われた。UBC で、図書館員からの働きかけがないにも関わらず、賑やかなラーニング commons と隣接する静かな閲覧室の使い分けが自主的になされていたことなどは、図書館員と利用者とのコミュニケーションが深い部分で成立しているからこそその結果ではないかと思った。直接会話をしたり、広報ツールを使ったりすることだけが利用者とのコミュニケーションではなく、どんなサービス、どんな空間を提示するのか、それ自体も図書館から利用者へのメッセージであり、それがどう使われるのかも利用者から図書館へのメッセージであるとの思いを新たにした。

D. 電子資料の管理・サービス---データベース、電子ジャーナル、電子ブック

電子リソースのコレクション概要

UBC

- ・電子ジャーナル 78,000 タイトル
- ・電子ブック 340,000 点
- ・オンラインデータベース 400 種

SFU

- ・電子ジャーナル 61,000 タイトル
- ・電子ブック 170,000 点
- ・オンラインデータベース 500 種

電子リソースの管理

UBC

Exlibris 社の以下製品を使用

- ・Verde ... ERMS (電子リソースの契約管理)
- ・SFX ... リンクリゾルバー (ナレッジベースのフルテキストへのリンク)
- ・Metalib ... 統合検索システム

Verde と SFX は同じナレッジベース (フルテキストリンク先データベース) を使用するため連携しやすい。アクセスの不具合などトラブルを Verde で管理できるということ。

また、ジャーナル契約のベンダーとして Swets、EBSCO と取引し、ジャーナルの契約内容、タイトルチェンジ、版元の変更、ISSN の変更などの情報を得ている。

ただ電子リソースの問題点は、出版社変更などの情報が事前に出版社より知らされず、パッケージ内のアクセスできるタイトルが変わるなど、最新情報を常にアップデートすることが困難なことである。また IP アドレスの変更などキャンパス内の問題もある。

SFU

PKP(Public Knowledge Project)の中で、様々なシステムを自館で開発している。

電子リソース管理システムとして reSearcher というシステムがあり、フリーウェアとして公開。ホスティングサービス、ソフトウェアサポートを行っている。

カナダを中心にアメリカ合衆国、アジア、ヨーロッパなどにユーザーがいる。

<http://software.lib.sfu.ca/>

- ・CUFTS ... ERMS
- ・GODOT ... リンクリゾルバー
- ・dbWiz ... 統合検索システム
- ・Citation Manager ... 参考文献管理システム Refworks などと類似

感想

UBC は日本でも導入館の多い Exlibris 社の SFX、Metalib に加え、ERMS システム Verde を導入している。Verde は日本国内ではまだ導入館が少ない。Verde はたいへん高額であり、また Swets、EBSCO などのベンダーの発注、契約管理システム、または図書館システムと機能が被る

こともあり得るのでは、と考えると、高額な投資をすることは難しい。このことを質問として投げかけたところ、EBSCO が現在 ERMS を開発しているなどベンダー側も進化しており、将来的には最低限のシステムで賄うことが望ましいとの回答だった。

また SFU は伝統的にシステムを独自開発してきた実績があり、電子リソース管理システムも開発、他館へ提供することまで行っていて、システム部門のレベルの高さ、業務意識の高さに驚いた。ただシステム担当のスタッフにいろいろ聞いてみたところ、大学のシステム部門との連携、学部との連携など、コミュニケーションの大切さを強調していた。問題なのは技術ではなく、どう連携してどのようなプランを立てるか、ということだと思う。そこがあって初めてシステム導入の方向性が見出せると思われる。

E. 高額な電子ジャーナルへの対抗 ---契約、統計、予算、コンソーシアム

雑誌の価格高騰への対処

雑誌の価格高騰への対処については、UBC、SFU とともに共通して、オンライン版への契約変更、コンソーシアムを通じた価格の低減を上げていた。

- ・冊子契約をキャンセル、オンライン版への変更。
- ・オンライン版は主要出版社については大規模パッケージをコンソーシアムを通じて価格交渉してより安価に契約。

<カナダのコンソーシアム>

- ・ British Columbia Electronic Library Network(ELN)

ブリティッシュコロンビア州のコンソーシアム。学部レベルの電子リソースの契約。

- ・ Council of Prairie and Pacific University Libraries(COPPUL)

カナダ西部のグループ。23 大学。

- ・ Canadian Research Knowledge Network(CRKN)

国家規模のコンソーシアム。73 大学。Elsevier、Springer、Wiley-Blackwell など主要出版社の大規模パッケージはほぼここから契約。

- ・ Electronic Health Library of BC(e-HLbc)

ブリティッシュコロンビア州のコンソーシアム。Health Care 関連。病院、医師などに特化。

キャンセル後の永続アクセス

いずれの図書館でも、キャンセル後の永続アクセスを保証するため Portico に参加している。Portico は不測の事態、出版社が倒産したり、自然災害などでアーカイブが提供されなくなった際にアーカイバルアクセスを補償する。非営利団体が経営、出版社と図書館とで共同出資して維持する。年間料金には様々なオプションがあるが、UBC では年 14,000 ドル、SGU では 10,000 ドル支払っていて高額である。

コレクションマネジメント

・ 図書館のスタッフが特定のサブジェクトエリア、特定の学部のコレクション構築を担当し、学部と協議しながら、キャンセルするタイトル、オンライン化するタイトル、大規模パッケージの導入などを決めている。

- ・ 電子リソースのコストパフォーマンスを図るために統計を活用している。

【UBCのコレクションマネージメント】

電子リソースの価格は毎年10%値上がりする。ベースとなるコレクション総予算は1,330万ドルで、そのうち電子資料が900万ドルを占める。寄付等による予算増はあるが、為替変動、インフレなどの状況も影響を与える。昨年度カナダドルは下落し、予算に大きな影響を与えた。

4年ほどの間に、ファンドマネージャー、サブジェクトスペシャリストなどのグループで雑誌の購読について、すべての冊子契約をキャンセル可能かどうか検討してきた。電子版が安定したプロバイダーから供給され、永続アクセスが保障されるものから優先的にキャンセル候補とした。昨年からはPorticoに加入。

サブジェクトスペシャリストは、学部と共同して、どのような電子リソースを導入すべきか、またどのタイトルをやめ、どのタイトルを新たに入れるべきか検討している。

【SFUのコレクションマネージメント】

リエゾンライブラリアン

- ・ コレクション管理のモデルを作る。予算割の案なども考える。
- ・ 予算管理、電子リソース、利用統計、コンソーシアム、ベンダー、出版社との連絡、交渉。
- ・ レファレンスライブラリアンとして、一般のレファレンスをするのみでなく、各自が2～4つの学部を受け持ってそのエリアのコレクション形成を行う責任を負っている。

感想

雑誌の価格高騰への対処として、冊子からオンラインへの変更およびコンソーシアムを通じた契約を両館とも上げており、日本の状況とほぼ同様である。ただ出版社の大規模パッケージは、プライスカップがあるにしても基本的に値上がりするので、いずれ予算をオーバーしてしまうのではないかと懸念がある。これについて質問をSFUで投げかけたところ、利用統計でパッケージのコストパフォーマンスを示し、できるだけ維持する方向で学部へ働きかけるが、もしパッケージの価格が上がり続け、予算が変わらない、または縮小されるとしたら、将来的にはいずれかのパッケージをキャンセルし、pay per viewに変更することになるだろうという回答だった。

オンラインジャーナルをキャンセルするためにはキャンセル後永続アクセスの保障が前提条件というのは共通した見解で、両館ともPorticoに加入している。Portico、あるいはLOCKSS、CLOCKSSなどオンライン版のアーカイブを維持する機関はいくつかあるが、日本ではこれに参加する大学図書館はまだ少ない。両館とも10,000ドル以上の金額を毎年支払っているが、Porticoはある意味保険のようなもので、日本の大学図書館でここまでの投資をするのは難しい。ただ、今後オンライン化が急速に進むと、アーカイバルアクセスの保障は大変大きな問題となっており、将来的にはこれらの機関に参加することも視野に入れなければいけない。

両館とも電子リソースのコレクションマネージメントを、学部と連携して分野ごとにその専門のライブラリアンが行っている。特に、SFUの「リエゾンライブラリアン」に注目したい。リエゾン＝つなげるという意味だが、学部と図書館、学生と図書館、ベンダーや出版社と図書館など、様々な人々をつなげ、連携していくことで図書館の機能が成り立っていくというのは、大変重要な視点であると思う。

F. 図書館資料収集方針（コレクション・ポリシー）

UBC では収集方針が 20 年前から枠組みとしては存在していたものの、現状としては機能しておらず、現在不要と思われるものは整理した上で来年には書面としてまとめたい、とのことであった。UBC の総資料予算は、1,330 万ドルであり、そのうち毎年 10% 増加する電子リソース (ebooks, ejournals, databases) が、約 900 万ドルで、購入予算の 65% 以上を占めている。書籍としての図書 (books) の新規購入予算は、あまり大きな比率を占めていないが、ただモノグラフ (研究シリーズ) については収集方針によって購入が大幅に認められており、担当者としてもその重要性を感じており、20 年前の方針を継続していきたい、とのこと。ちなみにモノグラフの昨年度予算は 200 万ドルであったが、今年度は約 250 万ドルであり、年間 5 万冊増加している。図書資料がカバーしている学問分野は人文学、社会科学、法学、医学、芸術、科学及び工学等と幅広い領域に亘っている。また前述 (1) の訪問機関別報告でも触れているように中国、日本、インドネシア、南アジア地域のいわゆるアジア関係のスペシャル・コレクションならびに UBC で専門領域にしている分野の稀覯本は特筆すべき存在であり特色となっている。

収集の方針については、学部学科の協議、アクレディテーションのニーズ、カリキュラム等のデータを加味し、さらに図書館において従来の再評価を行い次年度の収集方針を構築した上で、協議によって決定されている。

一方、SFU 図書館においては既に 1973 年に収集方針を発行。1982 年の改定を経て、2000 年以降リエゾンライブラリアンと学部の教員等との徹底した共同作業を通して作成され、図書館評議員会の承認を経て、2005 年 12 月に “SFU Library Collection Policy Statement” という新たな方針が打ち出された。その目的としては、学生と教員のカリキュラムならびに研究のニーズをサポートすることであり、その姿勢は「待ち」ではなく Faculty に対し情報を提供できるよう事前に予測し準備しておく (anticipate) という図書館の主体性が感じられる。

この収集方針は導入 (Introduction) から始まりその目的、Collection Management の責任体制、予算、図書館コンソーシア体制、図書・シリアルズ・電子ブック・Video・DVD 等の収集方針、等全部で 14 項目に分けて記載がある。その中で特徴的だと思われたのは、リエゾンライブラリアンの存在である。彼らは 41 部門の専攻領域にそれぞれ所属する専攻分野の書誌学に通じた情報スペシャリストであり、収集についての実質的な意味で最も重要な権限と責任を持っており、予算についても、その責任者である Head of Collection Management と一緒に協議を行うこととなっている。すなわち、方針の作成・資料の選定・予算等のすべてに関わる重要な存在である。なお、SFU においても予算削減傾向にはあるようだが、研究・教育のサポートを維持していくために資料購入予算の確保には努力をしているとの事で、図書資料 (books) に 270 万ドル、ジャーナル・データベース・オンライン資料については 600 万ドル (いずれも今年度) の予算が計上されている、とのこと。

感想

規模的には UBC の方が大きいですが、UBC には収集方針が枠組み程度しか存在せず、逆に SFU では 40 年近く前に方針が作成され、その後教員との協議を交えて二度にわたる改定を行ってドキュメントとして存在していることは意外であった。UBC の場合は、中央図書館の他にそれぞれが特色を持った多くのブランチとしての図書館があり、それらを統一した形での収集方針の作成を行う

ことは確かに困難だと推測された。一方、SFU の場合は中央図書館としての Burnaby を含め、3 箇所のカンパスにそれぞれの図書館がある。規模的にも統一の方針を作成しやすい、ということが言えようが、上述したように収集についての責任体制や予算構築体制等が明確なこと、等からも大変機能的な収集方針である、との印象を持った。また両大学に共通していえることであるが、購入予算に占める電子リソースの割合が極めて高い、との印象を持った。

G. 図書館スタッフ教育

カナダでは、CLA (Canadian Library Association) により、様々な教育制度が設けられている。自分より経験・知識のある指導者に付いて自分のキャリアを磨くメンタリング制度や、国内外の別の図書館で経験を積むインターンシップ制度などといった教育制度が用意されている。また、司書という仕事に興味のある人に向けての情報も CLA のホームページで親切にされていて、司書になる前からのサポートが行われている。個々の図書館でも独自で様々な研修制度・キャリアアップのためのバックアップ体制が取られている。

UBC 図書館では、6 ヶ月または 1 年間の特別休暇を取得することができ、その間、自分で立てた教育プランに沿った研修を行うことができる。その成果を報告する場として、人事担当者との面接が設けられている。また、様々な会議への参加や講習会への参加の機会を提供している。

SFU 図書館では、各職員に年間 700 ドルの研修費用を与えていて、最高で 4 年まで費用を持ち越すことができるようになっている。この費用は、EXCEL などの講習会への参加・様々な会議への参加・パソコンの購入など自由に使い、現在、約 10% のライブラリアンがこの費用を利用している。また、SFU 図書館では年に何度か、全てのライブラリアンが参加可能なランチ会を開催し、ライブラリアン同士のコミュニケーションを促し、情報交換の場としている。図書館の利用者が少ない時期には、Staff development day を設け、目録作成やパソコン操作など、自分の磨きたい分野を勉強する日としている。UBC・SFU 図書館共に充実した研修制度が用意されているが、参加自体は個人に任されているようだった。

感想

キャリアアップのための休暇取得や、研修費用の提供など、手厚いサポートが行われていた。大学院卒業が条件のカナダのライブラリアンだが、ライブラリアンになってからのキャリアアップも重視されていた。また、CLA によるメンタリング制度やインターンシップ制度は、ライブラリアンを国全体で育てようとする姿勢のように感じた。用意されている教育制度を利用するかどうかは、個人個人に任されているようで、SFU 図書館における実際の研修費用の利用率はそれほど高くないと感じたが、費用の利用以外にも多くのキャリアアップのための研修制度が用意されているため、やる気さえあれば、どんどんキャリアを積み、成長していける環境だと思った。

H. 地域における図書館の役割

UBC 図書館では、23 の分館を含めた全ての図書館資料を地域の利用者に提供している。資料の館内利用だけでなく、基本的なレファレンスサービスやほとんどのデータベースへのアクセス、図書館で開催している講習会やコンサート、展示会などへの参加も無料でできる。これらのサー

ビスについては、UBC 図書館の利用者カードなしで受けることができる。図書の貸出や、料金の発生する ILL サービス等を利用するためには、利用者カード (Community Borrower cards) を発行してもらう必要がある。4 ヶ月の利用で 40 ドル、1 年の利用は 120 ドルの料金。ただし 65 歳以上の高齢者には、1 年 40 ドルでサービスを提供している。また、卒業生は無料である。個人利用のためのカードの他、ビジネス利用のためのカード (Institutional Borrower cards) を、1 年 250 ドルで発行している。

また、2006 年より、UBC の Irving K. Barger Learning Centre は、州の貴重な資料を無料でオンライン提供するというデジタル化のプロジェクトに資金提供をしている。また、ビジネススクールの学生が、地方の商店のために経営プランを作成・提供したり、地域で出張講演会などを行うことで地域への貢献をしている。

SFU 図書館でも、UBC と同様、貸出サービスは有料で、同様のサービスを提供している。

VPL は、公共図書館であるため、当然、全てのサービスが地域の利用者のものであるが、特に移民の多いバンクーバーという地域を考慮した多言語資料を取り揃えていて、英語以外に 15 言語の資料を所蔵している。ホームページも 7 言語対応となっており、日本語のページもある。

また、英語が母国語でない利用者のために、英語以外の言語での講習会や英語のスキルアップのための講習会を開催している。多言語サービスの他にも、芸術・歴史・健康・キャリア・子育て等、幅広いテーマの講習会や、高齢者向けのパソコン講習会を日々開催している。

VPL は、毎日開館していて、ゆったりと読書できる空間や静かに学習する空間など様々な利用者のニーズに対応する座席が 1,200 席あり、週末には空いている席がなくなる状況だということだ。



感想

訪問した大学図書館は、地域の利用者に対し、単に図書を貸す、というサービスではなく、レファレンスサービスや講習会など積極的に地域に貢献しようとする姿勢が見られた。また、公共図書館ではあるが、様々な講習会を開催していて、図書館が市民生活の一部、となっているような印象を受けた。カナダで図書館が重要視されている理由の一つがわかったような気がした。大学図書館は、基本的には学生と教員の利用が中心となるが、図書館の地域への貢献は、大学自体を地域にアピールする大きな要因となると思う。

1. 図書館員の位置づけ (Status of Librarian)

始めに、この質問の性質上客観的な回答というものは存在せず、多分に回答者の主観が入らざるを得ない、ということをお断りしておきたい。

私が海外集合研修に参加するに際し、この質問を行った動機はいわゆる日本の社会において図書館員の位置付けが相対的に低いのではないかと、との認識があり、訪問先のカナダのライブラリアンといわれる人たちは修士号を持ち高度の教育訓練を受けていることが前提とされている、と

聞いていたので、そのことについて当のライブラリアンたちに自己の立場についてどう考えているかを直接尋ねてみたかったからである。

UBC では事前に当方より送っていた質問に対し、書面で「カナダでは社会全体そして個人レベルにおいても意思決定や知識創造の基礎としての情報の重要性が認識されてきており、そうした情報に付加価値をつけて提供できる専門職としてのライブラリアンは学問や企業の業績発展に貢献する重要な存在である」との回答があった。この件で、応対していただいた方に上記の趣旨の質問を行ったところ、自分（回答者）はライブラリアンではなくディレクターであり、あくまでもオブザーバーの立場で、とことわった上で概略として次のような回答があった。

「一般的にカナダの大学図書館では、ライブラリアンは教授職の一員とみなされている。またアカデミックな世界においては情報アクセスや研究・調査に必要とする資料を見出すことのできる重要な場所である、と認識されている。しかし、インターネット情報世代、ほとんどすべての情報を電子情報から得る、とりわけグーグル等を良い情報、悪い情報の区別もつかずに使う学生に対して我々は問題を抱えている。図書館ならびにライブラリアンは今コンピューター世代にどう対応するか、仕事のあり方にリメイクを迫られている状況である。学生・大学院生は知識の豊富さと彼らを支援してくれるその能力の高さに対してライブラリアンをとても高く評価してくれている、とライブラリアンたちは常識的には答えるが、その役割と価値観の理解には明らかなギャップがある。アカデミックな意味ではライブラリアンの位置付けが低いとは思わないが、こうした理解の誤りに自分自身で気付かなければ、図書館は必要とされなくなるか、単なる古い資料の保存場所、としてみなされる危険性がある。一方、公共図書館では、状況がまったく違う。ここでは地域社会の中で社会の変化に合わせ、新しい情報アクセスの創造に大変積極的に働いている。資金が潤沢ではなく、職を得る機会も多くはなく、かつ大学図書館に比べ給料が安い、という問題があるが。しかし、北アメリカで働くほぼすべてのライブラリアンが、今後このような危険性を抱えていくことになるだろう」。

次に、VPL で対応して下さった同じくディレクターの立場の方に、同趣旨の質問を行ったところ、「確かに我々は、多くの教育を受けている。自画自賛はしたくないが、市民から信頼もされているであろう。それは市民にとって良い情報を提供していることで、図書館が良い場所である、という意味での信頼である。しかしステータスが高いとは思わない。若者の教育の支援を行い、自由に情報を得る環境を提供すること、そうしたとても大切な仕事を行う場所に我々が置かれている、ということが大切なことである。学校の図書館もライブラリアンもカットされるという事実、それは決してライブラリアンの地位が高いということの意味しない」との回答があり、これはあくまでも個人的見解と最後にことわりがあった。

感想

日頃の業務内容を客観的にヒアリングする、ということではないので、どちらも個人的な見解、ということわりがついたが、両者ともに図書館が情報にアクセスする場所として重要な場所である、という共通の認識がある一方、謙遜ばかりではなく現実的な問題として必ずしもライブラリアンの位置付けが高い、と一概に考えているわけではない、と推測された。また両館とも電子情報が当たり前になっている世代、そしてグーグルのみで情報が十分と考えてしまっている世代には大きな危機感を持っているようで、それはわが日本の大学図書館でも共通に抱える問題であると思った。しかし、対応して下った図書館の方々いずれもその語り口に自身の仕事にプライドと

誇りを持って働いている、と強く印象づけられた。それは自分たちが高度な教育・訓練を受けてきたプロフェッションとしての自信の裏付けというだけではなく、月並みではあるが書籍媒体から電子媒体への比重の移行、という情報形態の変化はあるにしろ、情報の提供という大きな使命を持った図書館で、学生・教育・研究そして市民への教養形成のために教員と同等の立場で大変重要な役割を果たしている、という自負が彼らを支えているからではないか、と私は思った。

・各機関担当者

University of British Columbia Library

Dr. Leonora Crema / Associate University Librarian

Planning & Community Relations

Simon Fraser University Library

Dr. Lynn Copeland / University Librarian and Dean of Library Services

Vancouver Public Library

Dr. Shelagh Flaherty / Director of Central Library

・最後に

カナダの図書館は、確かに先進的であった。それは、IT 技術や情報化が進んでいるというだけの意味ではなく、ラーニングコモンズの運営、多文化・多言語対応、学内外の組織・機関との連携に見られるように、組織としてのサービスにおいて先進的なのであった。また、グローバル市民を作るのだという大学の使命は、大学のトップから現場で働く職員の一人ひとりに行き渡っていた。私たちが SFU で道に迷っていたとき、飛ぶように駆けつけ道を教えてくれた職員の姿が忘れられない。

カナダのライブラリアンはプロ意識が高い。ライブラリアンは自ら目標を立てて、一人ひとりの人間を大切にしつつ、奉仕し、広報活動を行い、着実にシステム化・デジタル化を推進していた。何よりも自分の仕事を愛し楽しんでいた。私たち日本の図書館職員も同じように行動できるのではないか。

バンクーバーでの 5 日間は、講義・質疑応答・見学と実に充実したプログラムが組まれていた。訪問先の方々のカナダ特有のホスピタリティで熱心に対応してくださったことに心から感謝の意を表したい。

私たちのつたない質問に丁寧に答えくださり、また私たちのプレゼンテーションを見て、参考にしようと言ってくくださったのには懐の深さを感じた。帰国してからもメールでの連絡もっており、こうした図書館職員相互の交流も一つの大きな成果であったのでないか。

今回の研修は、参加者一人ひとりがテーマを持って臨んだ。各人は、そのテーマの答えを見出したものと思う。

最後に、今回の研修実施を可能とくださった私立大学図書館協会をはじめ関係の方々に感謝を申し上げますとともに、今後も海外集合研修が実り多いものとなることを願って報告を終わる。

以 上